

『碧の瞳に囚われて?』

著: 森本あき

ill: 明神 翼

「また蒸し返したいのか？」

「そうじゃなくて…」

生きている実感。だれかに求められるという、初めてのこと。

それを選んだのは、三月。

納得して、うなずいた。だから、恥ずかしくても我慢していた。

怖いのも、初めてなんだから当然だと思っていた。

でも、ちがうのかもしれない。

セックスをする目的は、人によってちがっていて、する理由もさまざま。

だけど、その結果、新しい命を授かることがある。

それを、美しいことだ、とか、自然の神秘だ、とか、三月には思えない。

三月の両親が、避妊をしたのかどうか知らない。したけど失敗したのだとしても、何も考えずにやった結果、三月ができたのだとしても。

いらぬ、と。育てられない、と。

わかった時点で、抹(まっ)殺(さつ)してほしかった。

最初から最後まで無責任なまま、いまものうのうと生きているのかもしれない両親。

自分を捨てたことを後悔ひとつせずに、やっかい払いは簡単だった、と笑っているかもしれない人たち。

「…吐きそう」

三月は口を押さえた。

セックスしたい、と思えるような相手に出会わなかったから、深く考えなくてすんでいた。

この行為で子供ができるのだ、と。

その結果、自分は捨てられたのだ、と。

因果関係に気づかないでいられた。

「具合が悪くなったのか？ 医者を…」

体を起こすランスの腕を、ぎゅっつつかむ。

「行かないで」

一人にしないで。こんな真(ま)っ暗(くら)闇(やみ)の中に、おいてきぼりにしないで。

「無理しなくていい」

ランスは三月の隣に横たわると、三月の髪を撫でた。

「二週間ぶりに会ったら、ミツキが元気そうになっていて。私も、欲しいものを全部競(せ)り落とせた気分の高揚がつづいていたから、その熱を発散したくて。完全に健康にはなっていないミツキを脅(おど)すようなことを言った。もちろん、私がミツキを抱きたい気持ちは変わってないから、そのうち約束を果たしてもらおうが、いまじゃなくていい。私は、またしばらく掘り出し物を探す旅に出ようと思う。今度は古書を中心に据(す)えるつもりだから、全国行(あん)脚(ぎゃ)…でいいのか？」

聞かれて、三月はうなずく。三月よりも、ランスのほうがよっぽど語(ご)彙(い)が豊富なようだ。全国行脚なんて、たとえ知っていても使ったことはない。

「そうか」

ランスは笑う。

その笑顔が、やさしい。

それを、ずっと見ていたくなって。そんな表情で、そばにいてほしくて。

三月はランスをつかんだ腕に、ぎゅっと力を込めた。痛いかもしれないのに、ランスは何も言わない。

「だったら、その全国行脚をする。一カ月もすれば、ミツキももう少し肉がついて、健康も取り戻しているだろうから、そのときは容(よう)赦(しゃ)しないぞ」

それは、つまり、今日はやらない、ということだ。

「…なんで？」

「怯(おび)えて、真っ青な顔をしている子を無理やり犯す趣味はない。せつかく、よくなってきているのに、体の調子を落とさせたくない。私は大人なんだ」

「ランスって、いくつ？」

そういえば、聞いたことがなかった。若く見えるけれど、もしかして三十を過ぎてたりするのだろうか。

「二十六だ。ミツキは？ 十五とかか？」

「十五歳の子供に手を出したら、法律違反だよ」

三月は笑ってしまう。お、という顔で、ランスが三月を見た。

「二十二歳。若く見られることが多いけど、ちゃんと成人してる。だから、平気」

そもそも、外国人であるランスに日本の法律が適用されるのかどうか知らないけれど。成人していたほうが、きっと気は楽なはず。

…脅すみたいにして自分を抱こうとした相手に、罪悪感があるかどうかはわからないけど。

「知ってる」

ランスは目を細める。

「…え？」

「私が、気に入ったものならなんでも拾う性(せい)癖(へき)を心配している側近はたくさんいてな。ミツキについても、できる範囲での調べはついている。私は、ミツキのバックグラウンドには興味がないから、ちらり、としか見なかったが。二十二歳というのには驚いた。出会ったときは、小学生ぐらいかと思っていたから」

「小学生は言いすぎじゃない？」

三月はふくれてみせた。

さっきまで、あんなに具合が悪かったのに。自分を取り巻く何もかもが、汚いもののように感じられたのに。

ランスと話していると、落ち着いてきたのはどうしてだろう。

「じゃあ、中学生か？」

「だから、二十二だって言ってるのに」

三月は、つん、とランスの腕をつつく。こんな行為をするのは、初めてだ。だけど、なんだか楽しい。

「そうは見えない、と私は言ってるんだ」

つん、とつつき返された。三月の唇から、くすくすと笑いがこぼれる。

「ランスは年相応だよな」

また、つん。ランスが、つんつん、と二度つついてきた。

そのあとは、つついては逃げて、つかまってはつつかれて。最後はくすぐりあいになる。体格のちがいはどうしようもなく、三月は完全にランスにつかまえられて、くすぐられるがまだ。

「降参！ お願い、もうやめて！」

三月は涙を流して笑いながら頼んだ。ランスはにやりと笑って、三月から手を離す。

「私の勝ちだな」

「うん、ぼくの負け」

笑い混じりのかすれ声は、たくさんわめいたから。

それとともに、三月の中からいろんな気持ちが消えていった。三月は涙をふいて、ランスをじっと見る。

「して」

自然に、言葉がこぼれた。

「もう、大丈夫だから」

真っ暗闇に一人でうずくまっているような、どうしようもない恐怖は、もうない。

だったら、克服したい。

またやり直しになったら、おんなじところから始めなければならなくなるかもしれない。

それは、いやだ。

あの闇を、二度とのぞき込みたくはない。

「顔色は悪くないな」

ランスは三月のあごをつかんだ。

「だが、途中で気絶されたら、私が医者にならされる」

「平気だよ」

どういうふうになるのか、経験がないから断言はできないけれど。

たぶん、大丈夫。

本文 p106～111 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>